

第五回  
塩津能の會  
九州公演  
故塩津清人三十三回忌追善

平成30年11月24日(土)午後1時30分開演  
(12時30分開場)  
**大濠公園能楽堂**  
福岡県福岡市中央区大濠公園1番5号 TEL 092-715-2155  
<http://www.ohori-nougaku.jp>

## 【鑑賞券】

正 面(指定席)	/ 7,000円
脇正面(指定席)	/ 5,000円
中正面(指定席)	/ 4,000円
正 面(自由席)	/ 6,000円
脇正面(自由席)	/ 4,000円
中正面(自由席)	/ 3,000円

## 【電話予約・お問合せ】

塩津能の會事務局

TEL/FAX:03-3330-6803

## 【オンラインチケット申し込み】

<http://kita-noh.com/ticket>

(クレジットカード決済・コンビニ購入受取が可能です。)

塩津能の會オフィシャルサイト  
<http://www.shiotsu-noh.com>



詳しくはこちらへ→

主催:一般社団法人 塩津能の會

## 【会場案内】



## 能とは?

能とは舞(動き)と謡(歌)。セリフによる舞台演劇です。しかし、現代の演劇の大半がドキュメンタリー、つまり時を圧縮した物語であるのに対し、能は逆ドキュメンタリー、衝撃的な一瞬の出来事を引き延ばしたもの。一瞬とは人の出会い、別れ、生死などをいい、これらの背景にあるさまざまな物語を、観る人それぞれが心の中に描きます。「これによって能は百人が観れば百通りの見方ができる舞台芸術です。つまり隣の人との感想が違うことが常で、そこが難解と言われるところです。しかしこれこそが能の持つ魅力です。

九州(福岡)  
での喜多流の歴史

大濠能楽堂を擁する福岡は喜多流にとって由縁の地です。流祖・喜多七太夫長能が黒田藩の庇護を受けたことで開流に繋がりました。また明治維新の動乱期に七喜多流の大先達・梅津只圓が黒田藩のお抱え能楽師として困難を乗り越え、福岡の能楽の隆盛を築きました。大濠公園能楽堂の中庭にあるのは只圓翁の胸像です。この由縁の地福岡に、またひとつ能樂・喜多流の新しい灯を燈すために、熊本ゆかりの能楽師塩津哲生・圭介が「塩津能の會」九州公演第五回目を催します。日本が世界に誇る伝統芸術、能樂の精神を文化豊かに薫る福岡の地へ、そして広く九州の地へとあるたに拡げることを目指して活動に取り組んでまいります。

## 文化継承!

和風建築が減少し、畠の部屋がないという住まいも多く見られ、正座という礼儀作法すら出来ない、知らない人達が増加している現状にはとても不安を感じます。昨今文化発展向上の声はありながら、伝統文化の衰退が目につきます。能界の先人達も能の魅力を後世に伝えようと、明治維新敗戦の困難時もひたすらにその道を全うして来られました。喜多流の九州内での催しが激減した現状を何とか再興し、先人の思いを継ぎ伝えることが現代に生きる私達の使命だと思います。

## 第五回 故塩津清人三十三回忌追善 塩津能の會 九州公演

おはなし

塩津 主介

舞離子 実 盛 塩津 哲生

大鼓 白坂 保行  
小鼓 幸 韶佳友枝 大村 真也  
中村 邦生 定一彦

すじ  
司虫

とおる

狂言 仏師 シテ(すっぱ) 野村 万禄

アド(田舎者) 吉住 講

相原

すじ  
司虫

とおる

能

シテ(前老翁の靈) 塩津 圭介

アド(田舎者) 吉住 講

相原

すじ  
司虫

とおる

狂言 仏師

シテ(すっぱ) 野村 万禄

アド(田舎者) 吉住 講

相原

すじ  
司虫

とおる

「休憩二十分」

融開 シテ(後源融の靈) 塩津 圭介

アド(田舎者) 吉住 講

すじ  
司虫

とおる

シテ(後源融の靈) 塩津 圭介  
ワキ(孫僧) 御厨 誠吾  
後見 谷 中村 邦生 工藤 義彦  
小鼓 幸 白坂 保行 太鼓 吉谷  
地謡 正佳 相原 一彦 漢  
渡辺 佐藤 狩野 祐一 友枝 真也  
高林 咲津 哲生 大村 定一  
万禄 康喜 高林 哲生 呵ニ  
吉谷 一彦 咲津 哲生 呵ニ

(終了予定午後四時半頃)

都に上った東国の人々が、六条河原院まで来た  
ところ、ひとりの汐汲みの田子を背負った老  
人が現れます。六条河原で汐汲みとは、と思  
議に思った僧が尋ねると、老人は、この河原院  
はかつて河原左大臣といわれた源融が、陸奥  
千賀の塩竈の雄大で美しい景勝をそのまま都  
に作り、移り住んだといい、との謂れを語り  
ます。そのうちに月が出て辺りを照らし、趣深  
い秋の夕景色が二人の眼前に広がります。源  
融という人は、毎日難波から汐を汲ませてき  
ては院の庭で汐を焼かせ、その景色を楽しん  
だそれはだいそう風流な人であったが、後を  
繼ぐ人もなくこの河原院は荒れ果ててしまつ  
たのだ、と老人は嘆きます。僧は、この老人を  
慰めようと一緒に秋の名月を愛でることにし  
ましたが、しづかくして老人は、汐を汲む時刻  
だと池の汀に立ち寄ったかと思うと、姿を消  
してしまいます。

その夜、先ほどの老人こそ大臣の亡靈であつ  
たと気がついた僧が眠りにつくと、在りし日の  
姿で融の亡靈が現れ、月光に照らされながら  
華麗な遊楽に乗って舞いを舞います。生前の  
遊興そのままに、この月夜に興じていましたが、やがて夜明けとともに名残惜しい面影  
を残して、月の都へ帰っていました。



「融」前シテ



「実盛」後シテ



塩津圭介



塩津哲生

- 1955 喜多流職分塩津清人の長男  
熊本市出身。  
1980 「桜川」の子方で初舞台。  
1987 「経政」にて初シンデ。  
1989 「十五世喜多流宗故喜多実師のもとへ内弟子修行のため上京。  
1991 「道成寺」を渡き独立。  
1993 日本能楽会公演重要無形文化財認定指定。  
1996 今上天皇即位の社で「石船」子爵子折を勤める。  
1996 (平成六年より)流儀の若手育成を一手に担い今日に至る。  
2006 芸術選奨文部科学大臣賞受賞。  
2007 贈勲四等瑞宝。芸術選奨文部科学大臣賞受賞。  
2008 嘉賞賞受賞。

塩津能の會主宰。

札幌・東京・福岡・熊本・大牟田・竹田各地に専門会主宰。

- 2004 若者の若者によよ。若者のための能。若者能をたらあげ、  
以後毎年公演。  
2005 東京芸術大学教育学部卒業。  
2009 A.P.U立命館アジア太平洋大学非常勤講師に就任。  
2011 喜多流音楽年能にて能講師の笠置門「復々譲師」を被く。  
2015 道成寺を渡き独立。

平家の名将で名を傳えた齋藤別当実盛の物語です。篠原の合戦の時、鬚墨を墨で染め、錦の直垂を着て若やいた姿で戦いに出、討ち死にしたことが語り継がれています。

老いを隠すため染めた黒い髪を、木曾義仲の前で洗い流す場面や手塚太郎と組んで討ち死にした処を見せる後半の部分には、写実的な所作の多い見応えのある曲です。紋付袴姿で離子方・地謡のみを伴う舞離子で演じます。

すじ  
司虫

さぬ  
実盛